南山大学会場 - At Nanzan University

三河武士内藤家、大名への道

明治大学博物館の代表的な資料の一つに、七万石の譜代大名内藤家に伝わった近世・近代の記録（内藤家文書）があります。内藤家は、もともとは三河国碧海郡の矢作川の西に位置する姫郷の国人領主で、松平家（後の徳川）に服従して家臣化し、徳川の天下統一に伴って近世大名となった家です。

本企画展では、内藤家が徳川家の一家臣であった時代から、徳川家の政権獲得を決定づけた関ヶ原の合戦をへて、その地位を確固たるものにし、陸奥国磐城平領を治める大名となっていく様子を描きます。

見所の一つは、関ヶ原合戦の様子を描いた絵巻です。内藤家長は、関ヶ原の合戦の前哨戦である伏見城の戦いで、敵勢に弓で立ち向かう姿として描かれています。家長は、城を守って討ち死にしますが、この戦功によって内藤家は大名として大きく成長していく事になります。

弓を射る内藤家長

落城する伏見城と鳥居元忠

《関ヶ原合戦図画巻》
慶長５年（1600）の関ヶ原の合戦について、石田三成の挙兵から石田三成勢の総崩れまでを描く。関ヶ原合戦の様々なエピソードが登場人物の名前と共に劇的に描かれており、伏見城攻めの場面は、伏見城を囲む西軍、開戦、城に乗り込む西軍、応戦する内藤家長、落城する伏見城と鳥居元忠、と進む。

《難波戦記》
徳川家が豊臣家を滅亡させた大坂の陣の様子を描いたもの。写真は夏の陣図。内藤帯刀（忠興の事）の名がみえる。

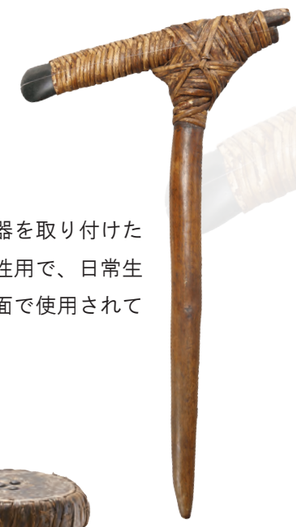
《江戸御上屋敷絵図》
（＊本展では絵図のタペストリーを出品）
天正 18 年（1580）の徳川家の関東移封に従い、内藤家も関東に移り上総国天羽郡内に２万石を与えられた。翌年には江戸にも屋敷地を与えられている。

明治大学会場 - At Meiji University

「二十世紀の石器時代人」を求めて
―南山大学東ニューギニア学術調査団の軌跡―

1964 年、南山大学は、東ニューギニア高山地帯（現・パプアニューギニア独立国）において、「東ニューギニア学術調査団」による民族学・考古学・言語学・ 精神医学からなる総合的人類学調査を行いました。これは科学研究費による戦後初期の海外調査となります。このとき収集された先史時代洞窟遺跡の考古資料や、石斧や衣服、楽器、装飾品 などの民族資料は、現在も人類学博物館に収蔵され、調査の歴史を物語る貴重なコレクションとなっています。

本企画展は、このコレクションから約 30 点を展示し、学術調査団の軌跡とともに、彼らがみた高山地帯の人々を紹介します。当時､「学問上の空白地帯」とされた東ニューギニアの歴史と文化を解明するために行われた調査は、彼らにとって異文化との出会いでもありました。そうした南山大学による人類学調査の歴史をぜひご覧下さい。



《実用石斧》
刃部に磨製石器を取り付けた実用石斧。男性用で、日常生活の様々な場面で使用されていた。

《前下がり》
男性が下腹部に身に付ける衣装。タカラガイやブタの毛による装飾が施されている。

《ハンドドラム》
砂時計型の胴部をし、片側に革が張られた打楽器。祭礼時など、踊りながら打ち鳴らされる。

《打製石器》
考古学班によって、洞窟遺跡から発掘された打製石器。同遺跡からは多種多様な石器が発掘されている。